三田文學

八月銷夏隨筆特輯

大正十五年[illegible]日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和十七年七月二十日印刷納本　昭和十七年[illegible]日發行

第十七卷　第八號

贈呈す

人形物語——吉田榮三に訊く（三）

花柳章太郎

舞臺の汗

私が「瀧の白糸」を打出して、歌舞伎座から雨の中を笠屋町の「福升」へ落付くと、丁度文樂の持役をすませて相生太夫と榮三師が來て、早速天ぷらの鍋前でたべながらの話になつた。

丁度殘暑のなごりがきびしく、その日の舞臺の暑さなどが、又くりかへされたのだが、水藝なぞ、人目に凉しく見えてかへつて演つて居る當人は引拔く衣裳を三枚も着込んで居るのでたまらないことなど話した。

しかし舞臺の汗は夏の文樂の流しかたと我々とは大變な相違であり、全く夏場の淨瑠璃の苦勞は大したものである。

汗のことで相生太夫は故師匠越路太夫の遺訓を話して呉れた。

越路太夫は決して舞臺で語つて居て汗をかく場合、濡手拭を使用しないと云ふことだ。

蒸し手拭でも、又、水で絞つたものでも、懸命に語つて居て汗を拭ふ時、熱くとも又、冷めたくとも、顏にあてた場合いゝ氣持ちになる。その瞬間だけ自分に還える。自分にかへつた時こそ、その語つて居る人物を離れてしまふから、その淨瑠璃のその人物でなく、自分自身になるから淨瑠璃がうつろになる。決して濡手拭を使はない、と云ふ話を聽き、いゝ訓だと思つたのである。

狐の話

或る時、狐の出る淨瑠璃を西洋人が觀て非常に感心し、その狐を是非見せて呉れと云つて樂屋へ來たのださうだ。

人形遣の某は、その柱にブラ下つて居る狐を見せたが、どうしても、西洋人はそれでないと云つて承知しないので、止むなく立つて柱から狐を取りそれを遣つて見せた。

それは舞臺で觀たあの活き〳〵とした精妙なものになつたので、その西洋人は狂喜して喜んだと云ふことを聞いたことがある。私は初代玉造の話を訊きたいのでせがんだ。榮三師は名人玉造の話を始めた。

『初代玉造の逸話』

初代玉造はんは全く名人だした。あてら親玉ちゆうて居りました。子供の頃龜吉ちゆうてお父はんは吉田德藏と云ふお人で、十一歳の折（天保十年）竹田の芝居（今の辨天座）に子供の太夫の繰り芝居があり、父にせがんで、初出勤したのやそうで藝名がないのでお父さんに付けて貰おうとしたら、お父さんは「お前は顏が圓い故玉造はどうや」その卽妙の當意が、その名となつたとの事でおます。

子供時代から苦勞して働いたさうでおますが、なか／＼役もつかん。その一座が、四國へ出稼ぎに行つた時先代萩が出て、子役の鶴千代が振られて喜んでると、千松を使ふ人形遣が納まらず「玉造見たいな新米の鶴千代では千松は使へない」と云ふので、玉造はい／＼ろと賴んで見たら、座の雜用の辨當がすくなくて足りぬから、お前の晝飯をくれろと云ふので仕方なく、それをその人形遣にやつて自分はその遣ふ鶴千代以上の空腹をしのんで御殿を勤めたちゆう有名な話がおます。

子供の時分からさうした苦勞を藝でしてた人やよつて、なか／＼負けん氣の勝つたお人で、その時代の役者の大立物、尾上多見藏はんの藝風ととてもよう似て派出な、血の氣の多い人だした。

名人の小國次はんがまだ大阪で米十郎と云つてはつた時、「傾城反魂香」を出しやはつて、その切に「畫ぬけ」大津繪の鷹匠と藤娘。濡場から雷となり、瓢簞鯰になる趣向の所作事に、もうその頃宙乘り物や仕掛物で名の出て居た玉造はんに智惠を借りてはと云ふ竹田（タケダ）の芝居の方から注文がおましたさうでんね。

米十郎はんも何せ後年の小國次となる程のお人だすよつて、「玉造に何が出來るものか」と云ふやうな意味で、人形遣を輕蔑しやはつたことが玉造はんの耳に這入つたので「芝居の元祖は人形だ役者に何が出來る」と云ふやうないきさつがあり兩方で衝突しましたんや。それで、玉造はんは文樂で座主に掛合つて米十郎の芝居と同じ「畫ぬけ」の所作を一緒の初日で出したんやそうだす。この二人の負けん氣の競爭は、親玉はんの勝やつたとのことだす……。不器用な人形でも工夫次第でどない器用なことも出來るもんやと云ふ評判を取り、文樂の早替りも一つの名物に迄なりましたいやさかい、玉造はんと云ふ人は偉い人だす。今、あんさんの話してはつた狐なぞも、全く玉造はんが使はつたら神技だすよ。何んせその當時は動物園なぞなかつた頃だすよつて、往來に居る犬を見てトテモ研究しやはつたさうで、犬と狐と違ふとこは犬よりも狐の方がコセ／＼してキョト／＼し居る動作をよく見てはつたんだんな、わての見て目に殘つて居るのは、玉藻前三段目「櫻壺の奥庭の場」で劔の威光に恐れて玉藻の前に惡狐が近かよれない。その狐の遣ひかたなど全くいまだに忘れ

られんもんだす……。

紋十郎はんと親玉はんとで使ははつた「二人八重垣」の奥庭も、狐になつてからは親玉はんが一人で使ははつた位、親玉はんの變化ものは見事のもんだした。

しかし、狐で一番派出なものは何んちゆうても、十種香の奥庭でんな。これは芝居の方でも早替りが一つの賣物となつてますが、人形の方が物が不器用なだけ、歌舞伎役者がするよりかへつて手際よくも見へます。

ほんでに。親玉はんの使ふ四の切りの型にわての工夫を入れてやるいろ〳〵の仕掛がおますが、それは、又ゆつくり話をします。

私は不器用な人形がかへつて人間の役者がする早替りより、鮮やかに見えると云ふ言葉に打たれた一人で、演ずる役者よりも三人で遣ふ人形が手際がよくゆくと云ふ點、それは並々ならぬ工夫があつてはじめて效果のあがる手練であるからだ。

榮三、相生の兩師の話を聽きたがつて、そこには私の家内の妹分である南の若い妓達がはんべつて居た。又それでなくとも、そうした神聖な藝の話を物を喰べながら訊くのはこの上もない非禮であるので、その話は宿題にして、桐竹紋十郎の話をして見た。

紋十郎と人形の怪

私の映畫初出演「殘菊物語」を一昨年、京都の撮影所で溝口君の演出で撮つて居た折、菊之助の大阪時代のことをよく知つて居る先代紋十郎のおかみさんが、殘菊の中村芝翫に扮する嵐德三郎さんのお母さんであつて、菊之助が松幸時代、大阪で苦勞して居た當時のことを種々聞いて參考にしたことがある。このお母さんは現在でも健在で、德三郎さんしきりに孝養を盡して居る。その先代紋十郎夫人の話を聞いてるうちに、紋十郎製作人形の怪談があり、その人形を見せて貰つた。

それは先代紋十郎が或る夏休みに北の新地に若力と云ふ、愛人があり、芝居の無い間のつれ〳〵に線香を練つて造つた「おやま人形」が、愛人の俤を寫して妙を得た逸品が出來上つた。そしてそれを愛人におくつたことは云ふ迄もない。愛人はこよなくそれを慈しみ、大切にしてお染の衣裳を着せ。秘藏して居たさうである。

そのうち紋十郎は死に、その愛人も亡くなつた。そのお妾さんのことは夫人も又德三郎さんも知つて居たさうであるが、その後何十年か經つて、大阪の堂島裏町の古道具屋が、そのお七の人形を抱えて不氣味な顏色で紋十郎夫人の處へ持込んだ。それは、そのお七の人形が道具市に出て居た。あまりいゝ作なので買つて來て店へ飾つて置いたのださうであ

る。

店へ出すと直ぐ賣れた。と一ヶ月ばかり過ぎてその客が返しに來た。「まことにすまないが引取つて呉れと云ふのだ。引取つて店にそれを置いておくとその内賣れた。それから一週間程すると又返へしに來る。そんなことが五六回續いたので、その道具屋も氣になりだしたので、最後に持つて戻しに來た客に聞いてみるとその客の云ふのには、

「家へもつていんで飾つて眺めると、どないしてもその人形が恐しい顏しをるんだがな。それでどないにも恐(こおお)て置いてけへん」そ云はれて見ると成程恐い顏だす。ほんでに、仲間を訪ねて賣つた出處を調べましたが、皆目分りまへなんだ。やつと若力はんの所からと分つても二十年程以前のことだすよつて、それからそれへと訪ねたあげく、お宅はんが紋十郎はんのお宅やちゆうこと訪ねて持つて上りました。どうぞ納めておくれやす。。

道具屋はホッとしたやうに件の「お七人形」を德三郎さんの處へ置いて行つたのださうだ。勿論、紋十郎夫人はなにがしかの人形の金を、その道具屋に支拂つたことは云ふ迄もない。さて問題の人形は巡りめぐつてその作者の家族のもとへ戻つた譯である。

紋十郎夫人にしても德三郎さんにしても夫なり父の作の、よしんば、それが愛人におくつたものであつても、故人の丹精をこめて作つたものであれば懷かしみこそあれ、その人形を恐がる譯でない。

私はそのだんだら染の鹿の子の着物を着たお七を見せて貰つたが、別に道具屋や、その買つた人達の樣に恐はい氣がしなかつた。落着くところへ納つてむしろ、ゆつたりとした、そして安心しきつて居る樣な表情をそこに見出した位である。

要はその人々の心持一つでその人形の表情が變るのであるまいか……。私は文樂の人形の出遣ひのそれに比べていさゝか小ぶりのそのお七のいぢましい美しさを、しみ〴〵と眺めたのであつた。

「三田文學」の書店豫約——近頃、屢々書店に求めやうとするが入手困難であるとのお問合せに接しますが、紙の節約のため發行部數は減少しても、當分增大する見込はありません。この際、直接本會に前金購讀を申込まれるか、お近くの書店に豫約されるのが御便利かと存じます。尙、本誌の前金購讀料金は

一ヶ年分　七　圓
半ヶ年分　三圓五十錢　(郵稅を含む)

一ヶ年四回「特輯號」を刊行いたしてゐます。

編輯後記

▽本號は「銷夏隨筆」號とした。遠く南北の戰線に征つてゐる同胞のことを考へれば、銷夏もないものであるが、われわれは職域奉公の誠を致し一日も奉公殉國の精神を忘れたことはない。銃をとつて夷敵に軍する心を持つて、われわれは銃後にペンをとつてゐるのだ

▽本號を、遠く戰線にゐる數多くのわれわれの同志に送達し、われわれの健在と、銃後國内の統制ある生活を知らせ、後顧の憂をなからしめやうとする。

▽この、四、五日の暑さは近年稀なものではないかと思はれる。ぢつと座つてゐてさへ汗が滲んで來る。卒業期の變更によつて愈々繁忙を極めてゐられる小泉塾長、高橋先生初め、各執筆諸家が、殊に本號のために寄稿して下さつたことは感謝の言葉がない。お蔭で特輯の名に逆かぬバラエティに富む内容を作り得たことをありがたく、重ねて心から御禮申上げる。

▽「大陸の姿」には、もつと力を注いだのであつたが、この暑さと止むを得ない所用のためもあつて、貰へる筈の原稿が殆んど半分しか集まらなかつた。それに、今策戰中の土地に關しては、殘念ながら記述の自由を許されないためもあつた。

▽「久保田万太郎句集」は好評裡に再版を急いでゐる。三宅君の「歌舞伎劇鑑賞」は八月初め、豪華な美裝を凝して刊行される。芝居繪の第一人者鳥居清言畫伯描くところの表紙は十色刷で美事である。秋までには折口信夫先生の「古代研究抄」と小島政二郎氏の長篇小説「眼中の人」は新に三百枚を書下し、太田君の「ゾラとセザンヌ」は珍重な寫眞を收錄し、他に新たなプランの好著と共に續々刊行するつもりである。

▽先月號の一頁評論欄に於て、兼ねて戒心してゐたに拘らず、批評が作品評の埒外に出、甚だ好もしからざる評論となつた。さうした評論を掲載した僕の不注意は何としても消し難いものであつた。

▽いはれのない壓迫には敢て一戰を辭せない僕ではあるが、あの記事に關する限り何とも抗辯の餘地がなかつた。只管、失態の前に頭を垂れ、あの記事によつて蒙られたであらう迷惑と不快とに對して深く當事者に陳謝したのである。筆に携つて二十餘年、不肖と雖も未だかつて私情を以て文を舞し人を傷ける事を潔しとせず、類を他に及ぼした事はなかつたが、今度こそ拭ふべからざる汚點をつけ、辱をさらし、慚惱の日を重ね、ただ慚愧に堪えぬものがあつた。今後、再びこの失態を繰返さぬやう十分自戒するつもりである。

▽それで、企劃としては優れた一頁評論であつたが、この際廢棄する事にした。

▽酷暑、皆樣の御健康を祈る。

和木清三郎

(停) 特價 金六拾錢 (郵稅三錢)

昭和十七年七月二十日印刷 昭和十七年八月一日發行 (毎月一回一日發行)

東京市芝區三田 慶應義塾内 編輯者 和木清三郎

發行者 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地 西脇順三郎

印刷者 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地 渡邊丑之助 (東東一二五)

印刷所 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地 愛宕印刷株式會社 電話芝二八八六、四三二〇

發行所 東京市芝區三田慶應義塾内 三田文學會 振替口座東京三七五〇五

東京市神田淡路町二ノ九 配給元 日本出版配給株式會社

賣捌 普通號一部 五十錢 二錢

賣捌 半ケ年 三圓五十錢 稅共

賣捌 一年分 七圓 稅共

賣捌 金 右購讀料金は一ケ年四回發行する定期特輯號料金を加算いたしたものであります。

一月、五月、八月、十一月號を定期特輯號といたします。

倘、臨時特輯號發行の場合はその都度既納購讀料より差額を申受けます。